

# 麦作情報 No.1

令和6年1月26日  
西松浦農業振興センター

## 1. 気象概況

月	半旬	平均気温		最高気温		最低気温		降水量		日照時間	
		平年値 ℃	本年値 ℃	平年値 ℃	本年値 ℃	平年値 ℃	本年値 ℃	平年値 mm	本年値 mm	平年値 時間	本年値 時間
12月	4	7.0	5.5	11.7	8.5	2.6	3.5	12.2	5.0	16.8	0.1
	5	6.7	2.8	11.5	5.7	2.2	0.8	11.3	16.5	17.6	2.5
	6	6.2	8.4	11.0	14.6	1.7	3.6	11.8	2.0	22.0	30.3
1月	1	5.8	7.4	10.5	12.2	1.4	2.5	9.2	8.5	17.6	18.6
	2	5.7	6.4	10.1	11.2	1.5	1.6	10.7	18.0	16.0	21.3
	3	5.5	7.4	9.8	13.1	1.4	2.1	12.9	2.0	14.7	29.1
	4	5.3	9.8	9.5	13.6	1.2	6.0	14.6	35.5	14.6	13.3
	5	5.1	4.2	9.4	6.8	0.9	1.3	15.3	6.0	15.7	6.3

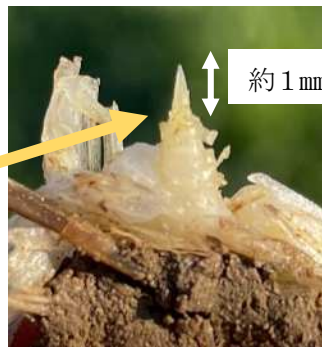
- 平均気温は、12月4半～5半旬にかけて平年より約 2～4℃低くなり、その後は平年より高い気温で推移した。1月5半旬になると再び積雪を伴う低温に見舞われた。
- 降水量は、12月4半旬以降は、適度な降雨があり、1月4半旬はややまとまった降雨があった。
- 日照時間は、12月4～5半旬は少なかったが、それ以降は多く推移し、1月4半旬はやや少なくなった。

## 2. 生育概況

- 令和6年産大麦の播種は、11月15日頃から始まり、播種盛期は11月20日から11月30日となった。
- 本年は、播種時期に降雨が少なく、播種作業は順調に進められた。
- 11月5半旬～12月2半旬までは気温が高く、土壌に適度な水分があったことから、播種後10日ほどで出芽し、出芽揃いも良好であった。

### 《 麦類の生育状況(1月25日時点) 》

- 11月中旬に播種された圃場では、現在、本葉6葉目が展開中(5葉期)、幼穂形成期を迎えている。
- 11月下旬に播種された圃場では、現在、本葉5～6葉目が展開中(4～5葉期)。
- 12月に播種された圃場では、現在、2～4葉期となっている。



11月中旬播種圃場の麦(1月25日時点)  
6葉目が展開中の麦  
(地下部に幼穂が出来ている)

### 3. 今後の管理

#### 1)排水対策

- 麦類の発根力は、最高分げつ期～節間伸長期(概ね7～8葉期頃)が最も高いとされている。根の活力維持のために、排水対策を確実に行う。
- 溝(畦間)は枕部分までつながっているか確認し、額縁明渠は確実に水尻につなぐ。
- 暗渠排水が整備されている圃場では、コルゲート管の栓が確実に開いているか確認を行う。



#### 2)麦踏み

**麦踏みの効果:①耐寒性の増加 ②根の伸長促進 ③早立ち防止による凍霜害回避 等**

- 本葉3葉期～節間伸長期(草丈25cm程度)までに3～5回程度実施する
- 10日間～2週間の間隔で実施する。
- 積雪後や除草剤散布後、麦の葉の変色や黄化が見られる場合は、麦の回復を待ってから実施する。

※土壌水分が高い状態で麦踏みを行うと、土が踏み固められてしまい、根の働きが悪くなるので土壌が乾燥した状態(畦間が白く乾いている状態)で必ず行う。

※茎折れや穂の裂傷につながり、穂数が減少するため、茎立ち期以降、麦踏みを行わない

#### 3)土入れ

**土入れの効果:①防寒 ②倒伏防止 ③無効分げつの抑制 ④雑草防除 ⑤表面排水 等**

- 本葉5葉期～茎立ち期(草丈30cm程度)までに3回程度行う。
- 分げつ初期に土入れの量が多いと、分げつを抑制することがあるため、生育初期は少なめに、生育に応じて土入れの量を増やしていくことを基本とする。

#### 4)肥培管理

- 追肥は3～4葉期に行い、施肥量は地区の暦を参照する。

※地力がある圃場(堆肥連用田、毎年倒伏している圃場など)および大豆あとの圃場では、麦の生育量および葉色から判断して施用量を減じるなど調整を行う。

≪ 生育状況ごとの管理作業(1月26日時点) ≫

①11月中旬播種圃場

→5葉期を迎えているため、土入れを実施し、雑草防除や排水促進に努める。

②11月下旬圃場

→すでに3葉期を迎えているため、麦踏みおよび追肥を行う。

③12月上旬播種圃場

→3葉期を迎え次第、麦踏み、追肥を実施する。

#### 4)雑草防除

- 水稲刈り取り後、雑草が繁茂していた圃場、耕起前の防除が不十分であった圃場では、スズメノテッポウ、カズノコグサ、タデ類、トゲミノキツネノボタンなどの発生が散見される。
- 土入れによる雑草防除を実施するとともに、こまめに圃場の雑草発生状況を確認し、除草剤の処理時期を逸しないよう対策を徹底する。
- 除草剤効果を保つため、雨前を避けて散布する。(散布前は、天気予報を確認する)
- 「ハーモニーDF」の使用時期は「播種後～節間伸長前まで」なので、使用の際は麦の生育状況に注意する。カズノコグサの防除は播種直後処理剤と「ハーモニーDF」(カズノコグサが 1～3葉期までに)との体系処理で行う。近年増加しているトゲミノキツネノボタンについても、同様の防除とする。

##### <カズノコグサとスズメノテッポウの識別法>

- 「根の色」で識別できる。『カズノコグサ』の根は、『スズメノテッポウ』に比べるとやや「白色」。

	種子の形	根の色
カズノコグサ	ハート型 	白色
スズメノテッポウ	粒 	赤褐色



##### <トゲミノキツネノボタンの特徴>

- 2枚目以降の葉は浅い切れ込みが入る(写真左)
- 4月～6月にかけて黄色い花をつける(写真右)
- 除草剤について、アクチノールよりもハーモニーの効果が高い。



#### ★除草剤散布後は、以下のことに注意する★

- ①「麦踏み」は、除草剤散布後に薬剤の影響で葉が黄色くなっている場合、麦へのダメージが大きいため、散布後1週間は控える。同様の理由で、麦踏み直後の除草剤の散布も控える。
- ②「土入れ」を、除草剤散布後すぐ行くと、雑草の蒸散作用が抑制され有効成分の根部吸収が妨げられるので散布後1週間は土入れを控える。(特にステージの進んだ雑草の場合は十分に間隔をあける)

○播種後除草剤が散布できていない圃場や、雑草の発生がみられる圃場では、除草剤の処理時期を逸しないように早めに茎葉処理剤を施用する。

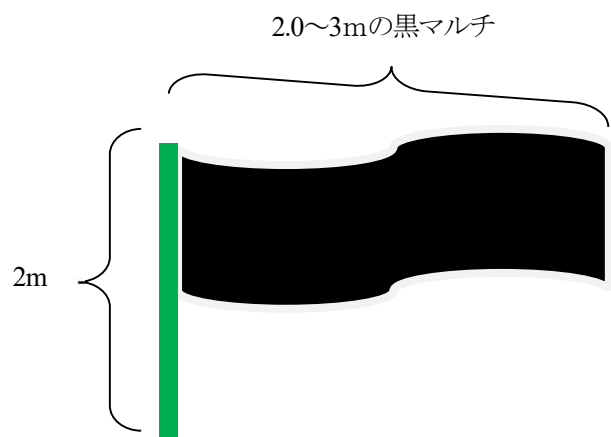
● 表 - 除草剤一覧表と使用方法

農薬名	効果のある雑草	使用量 (/10a)	希釈水量 (/10a)	使用時期	総使用回数	使用上の注意事項
ハーモニーDF	イネ科雑草 ・スズメテポウ ・カズノグサ 広葉雑草 ・ヤムグウ ・カズナ ・ハコバ ・トギミヤヅナボク	5~10g  カズノグサには10g/10aとし、 土壌処理剤との体系処理で使用する	100L	播種後~ 節間伸長前  ※カズノグサに対しては、 麦1葉期~節間伸長前	1回以内	・播種後にハーモニー細粒剤 F を散布された圃場では使用できません。 ・薬害が生じやすいので周辺作物への飛散に注意。 ・使用器具の洗浄を念にし、他作物との併用はしない。 ・スズメカビエラ、カスノドウには効果が弱い(抑制するが枯死しない)
バサグラン液剤	広葉雑草 ※イネ科雑草には効果がない	100~200ml	70~100L	生育期 (大麦は収穫90日前まで)	1回以内	・広葉雑草多発田に使用する。
アクチノール乳剤	広葉雑草 ・ヤムグウ ・カスノドウ ※イネ科雑草には効果がない	100~200ml	70~100L	穂ばらみ期まで (雑草生育初期)	2回以内	・広葉雑草多発田に使用し、ヤムグウ、カスノドウに効果が高い。 ・湿度に左右されず使用できる。 ・散布後、20日程度で枯死。 ・接触剤なので、必ず雑草の茎葉に散布する。 ・気温が高い日の散布は薬害が生じるので注意が必要。

### 5)鳥獣害対策(カモによる食害)

- ・ 近年、大きな河川近辺の圃場で、カモによる食害が増加している。食害痕は、麦の地際部まで草刈機ではらったようになる。
- ・ 対策としては、「のぼりを立てる」や、「テグスを張る」などの方法がある。
- ・ 「のぼり」は、2mの支柱に、2~3mの黒色のマルチをつるし、10aあたり5本以上を均等に設置する。

※「のぼり」は、マルチや支柱の長さが短かったり、10aあたりの本数が少なかったりすると効果が低減するため、被害の程度に応じて密度を加減する。



## 6)酸性土壌による障害

・1月下旬頃に大麦の下葉の黄化が目立つ場合、酸性障害の可能性がある。

酸性障害の場合、生育期間中に石灰資材を施用しても、麦の生育改善への効果はあまり期待できない。

(過去、土壌pH4.8の圃場に消石灰を100kg/10aあたり施用したが、大きな効果はなかった)

次年産以降にその圃場で大麦を栽培する際には、土壌pH測定を行い、必ず石灰資材の施用を行う。

※その圃場で、夏作に大豆を栽培する場合も必ず酸度矯正を実施する。



根の活性や量にも大きな違いが見られる



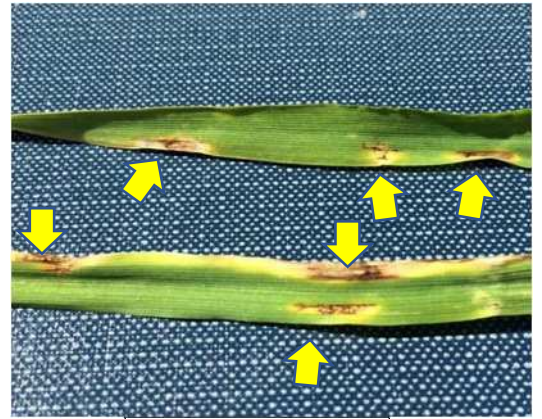
土壌pH 4.8

pH5.2

## 7) 病害虫防除

### ○ 網斑病

- ・ 網斑病は、葉や茎に網目状の模様の病斑を示す。(写真右)
- ・ 網斑病が多発し、上位葉が枯死すると収量が **3割程度減収**する可能性がある。
- ・ 網斑病の防除適期は、出穂直前～出穂期で、チルト乳剤による防除を実施する。ただし、出穂期を過ぎてしまうと防除効果が劣る。
- ・ 防除適期より前に、病斑の発生・増加が著しい場合は、早めに臨機防除を実施する。**ただし、農協のヘリ防除を利用する場合は、チルト乳剤の使用回数が1回までなので、シルバキュアフロアブルを選択し散布するなど、使用回数を超えないように注意する。**

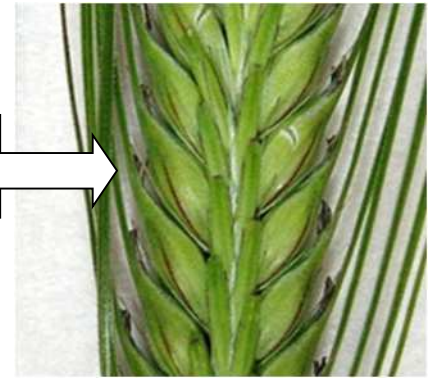


大麦網斑病の病斑

### ○ 赤かび病

- ・ 麦の品質や収量の低下を防ぐため、薬剤防除を徹底する。
- ・ 大麦の防除時期は、葯殻抽出始め(出穂期の約2週間後)頃となる。

葯殻が、大麦の芒の下に出てくる時期(出穂期の約2週間後)  
 ※葯殻とは開花受粉後に外側に押し出される葯の残骸のことである



- ・ 赤かび病が多発生の場合は、葯殻抽出期防除の1週間後に2回目の防除を実施する。
- ・ また、気温の上昇に伴い、出穂から開花や葯殻抽出までの期間は早まるので、注意する。必ず農薬登録を遵守し、**収穫前日数に留意して**農薬散布に努める。

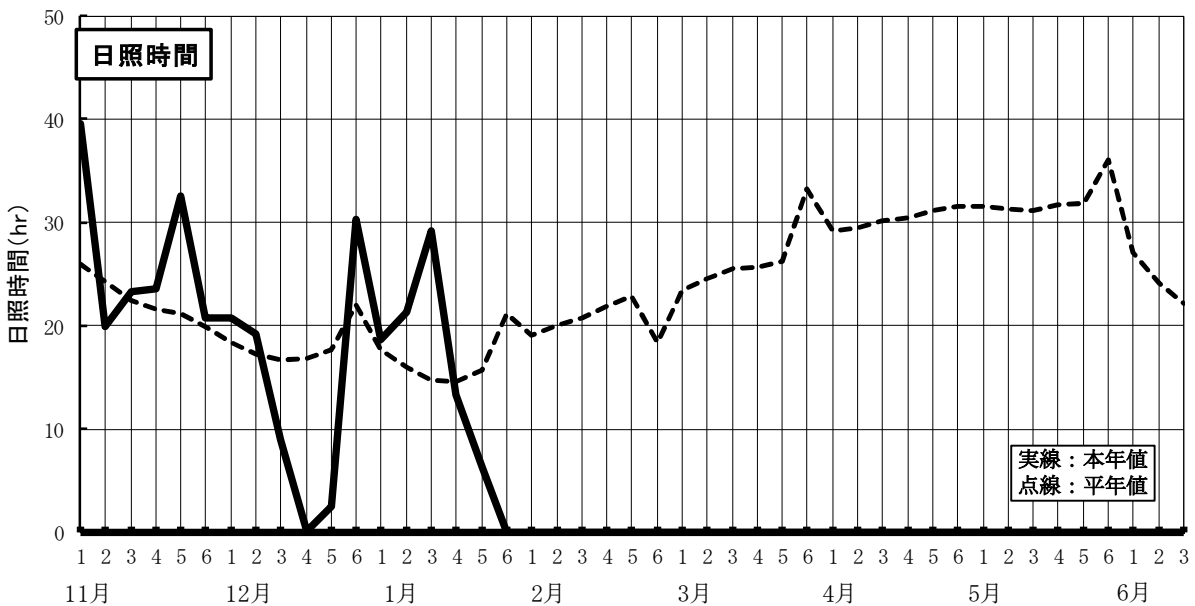
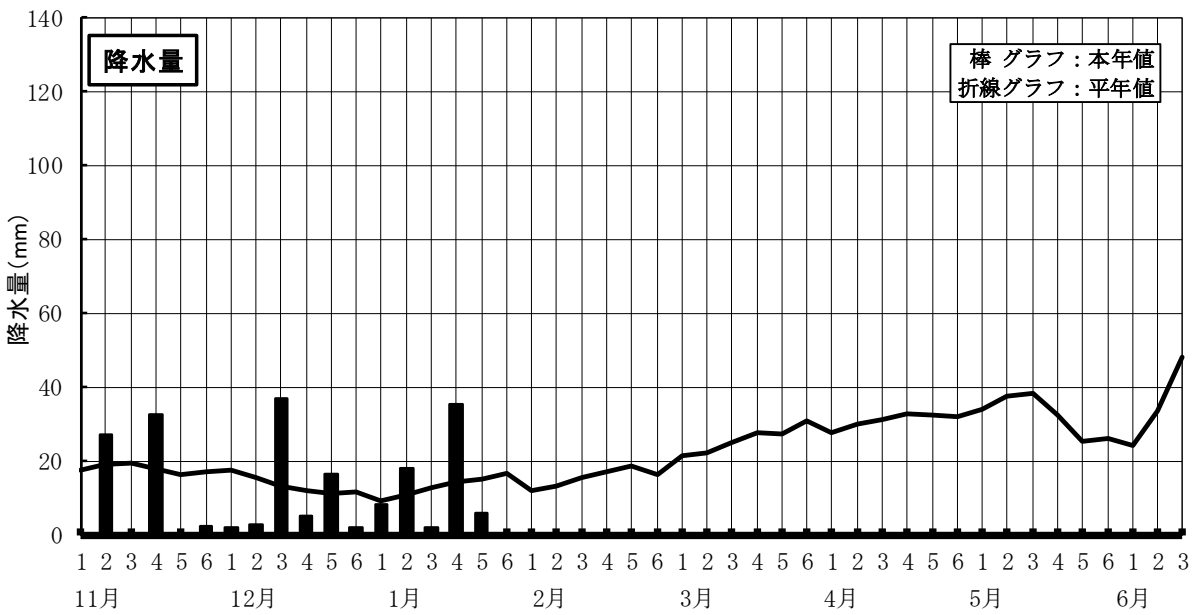
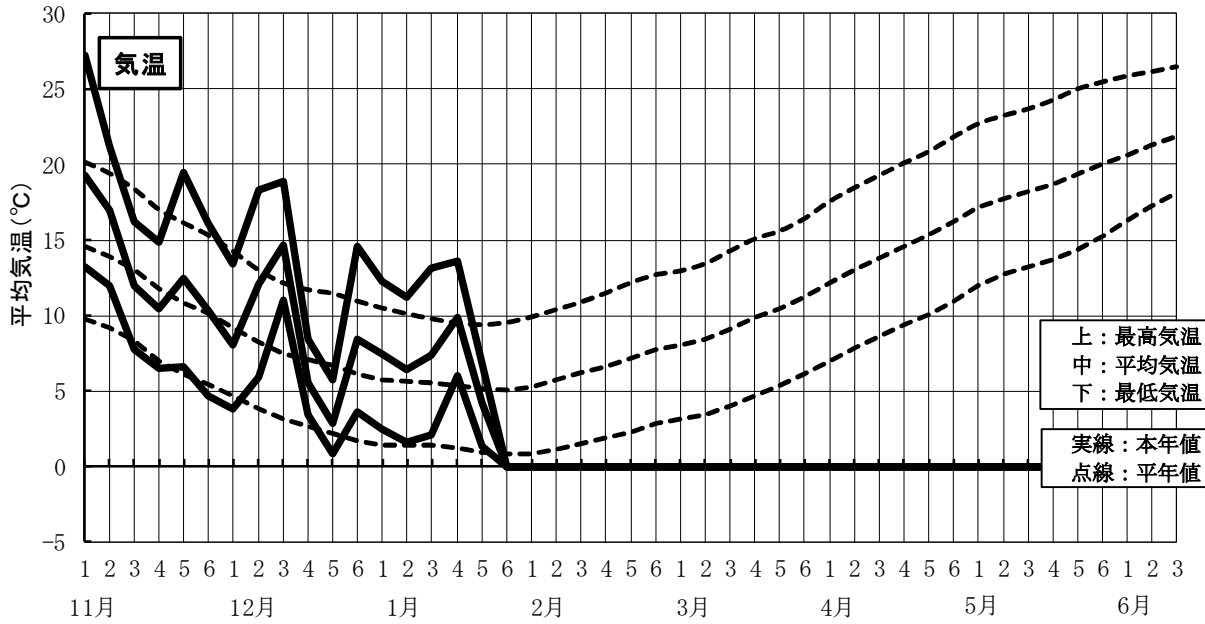
#### 【赤かび病 防除薬剤使用基準】(対象作物は大麦)

薬剤名	適用病害虫	希釈倍数	10a あたり 散布量	使用時期	使用回数	散布方法
チルト乳剤 25	赤かび病	1000 ~2000 倍	60~150L	収穫 21 日前まで	1回以内	散布
		8倍	800ml			無人ヘリ
シルバキュア フロアブル	赤かび病	2000 倍	60~150L	収穫14日前まで	2回以内	散布
		16倍	0.8L			無人ヘリ
トップジン M 水和剤	赤かび病	1000 ~1500 倍	60~150L	収穫30日前まで	3回以内 (出穂期以 降は1回以 内)	散布
トップジン M 粉剤 DL		—	4kg	収穫14日前まで		散布
トップジン M ゾル		1500 倍	60~150L	収穫14日前まで		散布
		8倍	0.8L	収穫21日前まで		無人ヘリ

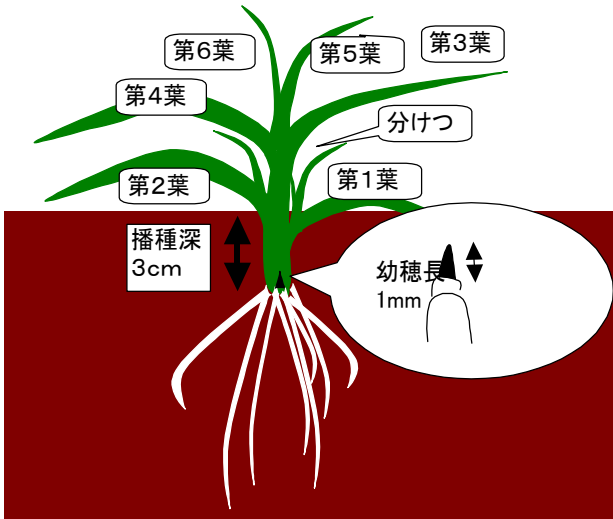
# R6年産麦類生育期間気象グラフ

アメダス観測値 (伊万里)

西松浦農業振興センター



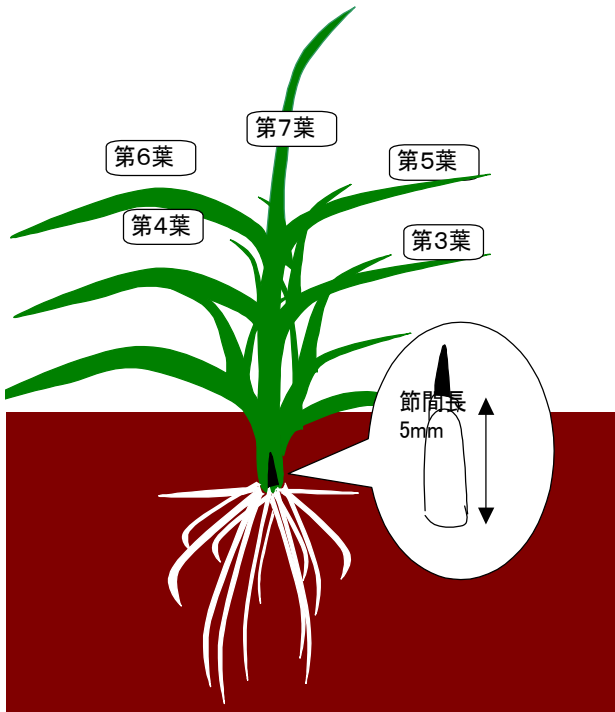
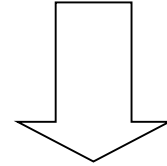
# 参考 麦類の生育ステージ



幼穂形成期

## 幼穂形成期

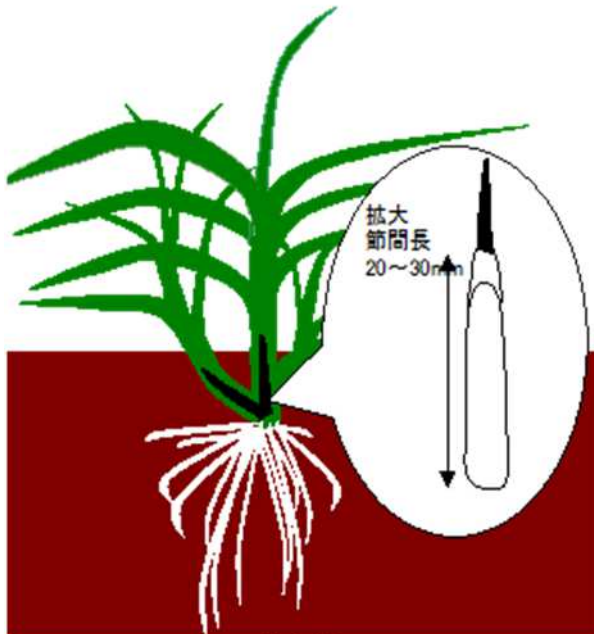
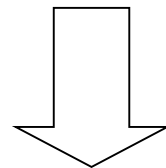
幼穂の長さが1mmとなったとき。  
幼穂は地下部に存在する。  
葉令は5～6葉期。



節間伸長期

## 節間伸長期

下位節が伸長し、幼穂が地下部近くに上がってくる。節間長が5mmとなったとき。  
麦踏みの晩限が近づいてきている。  
葉令は6～7葉期。  
草丈は、20～25cm程度



茎立期

## 茎立期

節間伸長期から2週間程度経過したときで節間長が20～30mmとなり、幼穂が地上部に上がってきたとき。  
この時期になると麦踏みはできない。  
幼穂凍死の危険性が高くなる。  
茎立ちが早いときは、幼穂保護のために土入れを実施する。  
草丈は、30cm程度